



空から見た臼杵市街

臼杵川（左中央から右方）と末広川（左上から右中央）の小複合三角州に発達。中央の右端が臼杵港。

海部の地理(一)

— 臼杵と佐賀関 —

矢野 弥生

(会員・佐伯市中山区)

はじめに

- 一 地域の概要
- 二 城下まちから商工業都市へ
- 三 臼杵の農業と臼杵湾の漁業
- 四 臼杵の集落
- 五 佐賀 関

はじめに

豊後水道の西岸域は、北部は豊予海峡に突出した佐賀関半島の関崎を起点に、南はリアス式海岸が続く佐伯湾南岸の鶴見半島の鶴御崎の間の南北約四十キロメートルの沿岸地域を指している。しかし、一般的には、さらに南へ延長して蒲江町宇戸崎までをいう。

この地域については『豊後国風土記』に「此の郡の百おおみ

姓は並、海辺の白水郎なり。因りて海部の郡といふ」とあり、古来大分平野の東部までをふくめて海部郡とよばれていた。本稿では、現在県都大分の周辺の性格の強い佐賀関町から県南部の蒲江町までの豊後水道西岸域の市町村と、内陸部の南海部郡の町村をふくめた地域を対象とする。これらの海部地域の自然環境・人口・産業・集落・出稼・観光などを地理学の視点から考察し、海部の地域性を考えてみたい。

一 地域の概要

この地域は大分県の東南部に位置し、豊後水道西岸の臼杵湾と別府湾南岸に臨む。沿岸部はリアス式地形で、山地が大部分を占めるが、河川の中・下流域には阿蘇溶

岩の丘陵や台地・河岸段丘が点在しており、畑や集落の立地をみている。また、小規模な谷底平野や三角洲もみられる。

臼杵湾は東北東に開いているが、この方向は臼杵―八代構造線に起因すると考えられ、佐賀関半島は三波川帯の結晶片岸類で構成され、豊後水道沿岸では最も出入りが少ない。また、臼杵湾南岸一帯は大部分古生層からなる。この地域の気候は内海型気候を示し、冬の気温がやや高く天気がよいことである。年平均気温は一五・八度年間降水量は一七三六ミリメートルである。

臼杵・佐賀関地区は古代、豊後国海部郡に属し、丹生佐加の二郡に属していた。現在は臼杵と佐賀関町の一市一町からなる地域である。

臼杵市 明治二十二年（一八八九）町村制の施行にもない、臼杵町・福良村・二王座村・海添村の一町三村をもって臼杵町となり、明治四十年に市浜村・下南津留村・上浦村の近隣三か村を合併して県下最大の町となる。

昭和二十五年、隣接の海辺村と合併し、県下第六番目の市として誕生した。昭和二十九年、旧藩時代から歴史的に共同生活圏であった佐志生村・下の江村・下北津留村

・上北津留村・南津留村の五か村を吸収合併した。江戸期から伝統のある味噌・醤油の醸業や、造船業・カボスや甘夏柑の栽培・突ん棒漁業など、地場産業が発達している。また、臼杵石仏や城下町「臼杵の街並み」などは全国的に知られている。昭和六十三年現在、三万八千九百八十六人、世帯数一万千八百三十七世帯。

佐賀関町 明治二十二年町村制施行で関村と白木村が合併、佐賀関町が成立した。昭和三十年（一九五五）佐賀関町・神崎村・一尺屋村が合併し、現在の町域となる大煙突をもつ日本鋳業の製練所は有名だが、そのほかタイ・関アジ・関サバの一本釣りや甘夏柑なども知られている。また、日豊海岸国定公園の最北部にあたる。高島はウミネコの生息地で、瀬戸内海国立公園に指定されており、変化に富む自然に恵まれ、関崎から見る速吸瀬戸の豪快な展望はすばらしい。昭和六十三年現在、人口一万六千四百二十四人、世帯数五千九十二世帯。

二 城下町から商工業都市へ

市街地の発展 臼杵の市街地の形式は大友宗麟築城以

来の城下町に始まり、藩政期は臼杵藩五万石の城下町で豊後経済の中心地であった。廢藩置県で政治的要素を失い、孤立した地形も影響して一時町は停滞した。しかし商談会などによる優れた積極的な指導、すなわち、町八町などの商業地区の活性化や、産業都市への転換に向けて、築港頼母子を仕立てての新港建設や、鉄道の誘致、港・駅と旧市街地を結ぶ港町道路の敷設などにより封建都市から近代都市へと脱皮していった。⁽²⁾

いま、市街地拡大の状況を埋立てによってみると、図(1)のとおりである。明治初年の「第四大区十二小区臼杵村絵図」と明治九年の絵図とを比べると、埋立てが行われた形跡はない。しかし「続臼杵時代考」(『臼杵史談』)には、明治十八年ごろに大手弁形を中心に埋立て工事が竣工したとあり、このころ埋立てが始まったようである。

明治二十一年(一八八八)の「大分県豊後国海部郡臼杵町」の絵図では、今橋から古橋・辻広場北端にかけての丹生島の西側付近が埋立てられている。それと同時に臼杵川沿岸も造成された(図中のA)。ついで大正二年(一九一三)まで丹生島の北と南側で埋立てが行われた。

それは、現在の市民グラウンド南端と城南・港町にあたる一帯である(図中のB)。

図中のC・Dにあたる部分は堀川であった。堀川は近世を通じて町八町の港となっていた。しかし、二期にわたる埋立てによって姿を消した。そして洲崎の造成が昭和四十三年(一九六八)に完了(図中のE)し、ほぼ現在の市街地を形成するに至る。⁽³⁾この埋立てに伴い、市街地中心部の辻周辺から市役所・警察署・消防署・県事務所など官公庁は城北の洲崎埋立て地に移動している。

また、洲崎埋立てに伴い、県道の建設と拡幅、そして中須賀橋の架設(昭和五十三年)など街路整備が行われた。最近では、市街地は臼杵川をこえて北方の市浜や戸室の河岸段丘や江無田から熊崎の沖積地で宅地化が進んでいる。昭和六十三年には戸室の国道二一七号線熊崎バイパス沿いに、臼杵市最大規模の住宅団地(約六万平方メートル)の建設が進行するなど、市街地は急速に北方へ伸びている。

停滞続く人口 昭和六十年の国勢調査による臼杵市の総人口は三万九千七百十九人で、県内十一市の中では県南地域の佐伯市に次いで第七位で、人口規模は小さい。

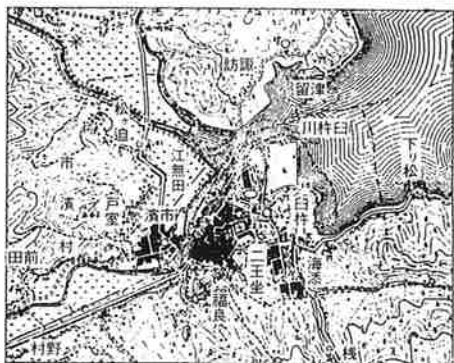


図1 明治以降の白杵市街地の埋立て

明治中期の地形図
(明治36年測量5万分の1「白杵」図幅より)



白杵市街地(昭和62年)



『うすきの歴史的環境と町づくり』(昭和61年)による

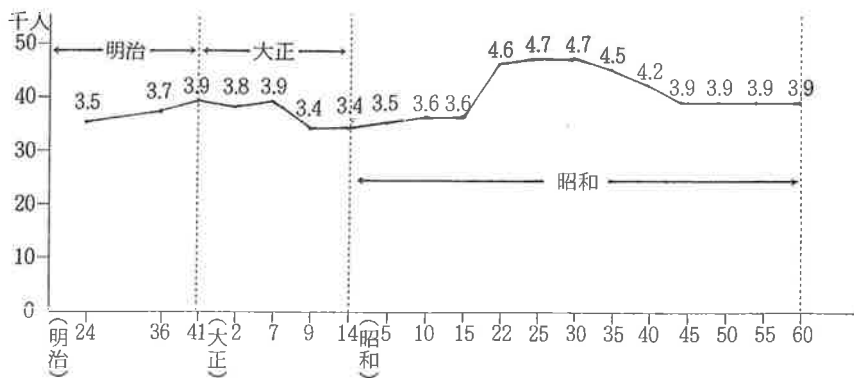


図2 白杵市の総人口の推移
(『大分県統計書』・『白杵市統計書』により作成)

いま、明治以後の総人口の推移を示すと、図2のとおりである。すなわち、臼杵市の人口は明治・大正・昭和の三時代を通して増加は緩慢であり、横ばいの状態であることがわかる。この時期、我が国の総人口が約四倍に増加していることから考えても、その著しい人口停滞の状況が理解できよう。

大正九年（一九二〇）には第一回国勢調査が実施され臼杵市の総人口は三万四千五百五人と計上された。大正七年に比較して四千六百八十三人も急減しているが、これは人口の実際的減少よりも、現住人口調査と近代的な第一回国勢調査との調査方法の技術的な差異によるものである。すなわち、従来の統計（役場の戸籍簿による）は、市外に働きに出たり、県外に移住しても、いちいち届け出ない者が多かったことを示すもので、過大に推定されていた。

戦後の人口は、配給や米穀通帳など登録人口によったもので、比較的現住人口に近く、戦前の昭和十五年（一九四〇）三万六千八百二十八人に對し、同二十二年は四万六千五百七十三人となり、七年間に九千七百四十五人二六・五％と急増しており、更に増加傾向は続き、同三

十年に四万七千四百五十七人とピークに達した。これは戦争の終結に伴う復員者・引揚者や大都市地域からの疎開者の定着、更にベビーブームによる出生数の増加などによるものと考えられる。

臼杵市の人口も、昭和三十年をピークに、それ以後は我が国の高度成長に伴い減少しており、昭和五十年まで国勢調査四期連続減少していることは注目される。また臼杵市の人口は昭和三十年四万七千四百五十七人から同六十年の三万九千七百十九人と、三十年間に七千七百三十八人、一六・三％減少している（県人口は、この間に二・一％減少）。しかし、昭和五十年から五十五年にかけては一・五％増加しているが、これは、同五十二年の白津バイパスの開通に伴い、地価の安い臼杵市へ津久見市から転入者が増加したことなどによるものであろう。

昭和六十年には、五十五年に對し、〇・一％減少しており、臼杵市は依然として人口減が停止していない。県内の十一市について見ると、臼杵市と同様、人口五万人未満の津久見・竹田・豊後高田・杵築の各市も人口流出が著しく、人口減少が続いている。これらの傾向は、全国的に見ても、北海道・九州などで、かつて炭鉱の町と

して孤立した都市などに見られる。だが、最近はこの都市も人口減少は鈍化の傾向にあるものが多い。

伝統のある食料品工業 白杵市の第二次産業の就業人口率は三二・八%（昭和六十年）で、全国平均三三・〇%とほぼ同率である。また、県下十一市の中では日田市について高率である。白杵市の工業について、事業所・従業者数と製造品出荷額を示すと図3・図4のとおりである。すなわち、従業者数は昭和三十五年から横ばい傾向を示しており、事業所数は昭和三十五年をピークに減少してきている。しかし、製造品出荷額は順調に伸びていることがわかる。

白杵市の工業は食料品工業と輸送用機械の二大業種に代表される（表1参照）。この二大業種が圧倒的比重を占めており、昭和六十年では、事業所数の五九・八%、従業者数の七〇・五%、製造品出荷額の九〇・四%にも達している。中でも、地場産業として発達してきた醸造業のウエイトが高い。

白杵市の醸造業の歴史は古く、慶長五年（一六〇〇）美濃国（岐阜県）から稲葉貞通が白杵藩主に移封されたとき、御用商人としてきた可児孫右衛門が酒の醸造を始

めたのに起源をもつという。歴代藩主によって保護育成され、白杵の特産物となった。白杵市には味噌・醤油の工場が大小入り交じって多く立地していたが、近年その数が減じて、現在では可児醤油・フンドーキン醤油・富士甚醤油の地場大手三社を残すのみとなり、中心部の本町・中須賀と末広にそれぞれ立地している。

大分県では、昭和四十七年から味噌・醤油の業界は協業化などの構造改善を積極的に進めてきており、この十年間に生産量は急激に伸びている。

県下二大メーカー富士甚醤油・フンドーキン醤油を中心に協業化による合理化が進み、現在、味噌が二豊味噌協業組合（三十六社・末広に工場立地）、大分味噌協業組合（十社・中須賀に工場立地）、醤油が二豊醤油協業組合（四十社・大野に工場立地）、大分醤油協業組合（二十五社・望月に工場立地）に再編されている。

協業化によって、これらの工場の製品は、一段と品質を高め、コストダウンのメリットも出て、九州一円、山口・愛媛、遠くは関西・関東まで広範囲にわたり販路が及んでいる。最近では「多数の小型タンク」で、消費者の好みの多様化に合わせた各メーカー独自の味づくりに

力を入れ、少量多品種生産を図っている。

また、昭和五十九年にはバイオテクノロジー（生命工学）の町づくりを目指した「臼杵バイオポリス懇談会」が発足し、細胞融合研究会による研究活動を続け、成果をあげている。

酒釀造業は久家本店・小手川酒造・岡田酒造など三社が立地しているが、戦前は九社もあったという。食品工業の中で、その出荷額が圧倒的に高い割合を占めているものに、福良に立地しているサントリー臼杵工場がある。この工場は戦前の軍需工場で、航空燃料としてアルコールを、サツマ芋から製造していた。戦後サントリーに払い下げられ、サツマ芋を原料とする二級ウイスキーの製造が始まった。水質汚濁などの問題も生じたが、現在では原料は輸入物コーンに転換し、臼杵最大の食品工場に発展している。⁽⁴⁾

臼杵に醸造業が発達した要因の一つに、臼杵の水が、竹田の水と並んで、質的・味覚的に最上位にランクされる水質であることがあげられるが、更に、明治期には、八町に商談会という民主的な商人の組織が生まれ、優秀な経営者がいたことなどのよき伝統があることも見逃せ

ない。

また、食料品工業としては、鐘詰工業の九州食糧品工業が、昭和初期城東の板知屋に立地した。最初は津久見や臼杵のミカンを原料とした鐘詰が主体をなしたが、労働力の季節性を解消するため、食肉鐘詰・ジュース・子供用のアイスクリーム・菓子など多角経営へ転換している。そのほか、臼杵名物の臼杵せんべいがある。戦前は工場数も十六軒あったが、いずれも家内工場のため、生産規模の拡大に限界があり、また後継者不足や競争激化により、現在九社にその数を減じている。このため、構造改善高度化事業として、三、四社が集まって「臼杵せんべい協業組合」をつくって新たな発展を図っている。⁽⁵⁾

造船業とその他の工業 輸送用機械工業は、事業所数二十一、従業者数九百九十五人、出荷額三百七十二億六千百万円（昭和六十年）となっている。大正八年（一九一九）に焼玉機関の専門工場として設立された臼杵鉄工所（昭和五十三年倒産。再建中）が城東の港灣埋立地に中小の造船所が下ノ江に立地している。

また、JR上臼杵駅近くには、後背地の大野郡の葉タバコ産地を控えて立地した日本たばこ産業株式会社（旧

専売公社）臼杵工場（明治三十一年に臼杵専売所として発足）やメリヤス加工の臼杵ニット（昭和三十七年誘致）市浜に臼杵製薬などがある。

臼杵の工業の全体的特徴としては、①全般的に伝統があること、②各々の工業の立地相互に関連がないこと、③工場の立地が自然的基盤よりも、交通の結節点として地理的位置に志向していること。つまり、近世以来の臼杵と大阪との物資の流通は明治以降も大阪市場への味噌・醤油・水産加工物の出荷という形態で存続し、一般に地場市場を志向する食料品工業を、移出産業の地位まで高められた。④臼杵の工業化に軍需産業が果たした役割はかなり大であったこと。特に工業基盤の未熟な時期に国家資金の導入、国家による労働力の動員は、臼杵の工業を著しく推進させた。例えば臼杵鉄工所・東九州造船・サントリー臼杵工場などがあげられる。の四点があげられよう。

伸び悩む商業 昭和六十年の臼杵市の第三次産業就業者数は四千八百九十四人で、卸売・小売業が千五百三十一人と最も多く、サービス業も千五百二十一人と同数に近い。更に、運輸通信業千九十三人、公務員四百八十人

金融保険・不動産業百九十一人、電気・ガス・水道業七十一人となっている。臼杵市の第三次産業人口率は五・七％で、全国平均五七・五％に及ばない。

臼杵市の商業の中心は、臼杵藩五万石の城下町であった旧臼杵町にある。八町と呼ばれた町屋のあった旧市街本町から畳屋町は商店や銀行が集中し、商業の中心地域となっている。

明治・大正期の臼杵は大野・直入二郡の物資の供給基地であり、商圏は大野郡の一部にまで広がっていた。しかし、鉄道網の整備、更に第二次世界大戦後の国道・県道の再編整備と交通機関の発達、特にモーターゼーションの普及発達などにより商圏は次第に失われていった。

昭和三十年代から経済の高度成長期に入ると、大都市への人口集中が起る一方で、臼杵では過疎化が進行し、経済の地盤沈下が深まり、大分市の衛星都市的な性格が強化され、商圏も区域内に限定されるようになった。

いま、臼杵市の卸・小売業の動向を見ると表2のとおりである。すなわち、大分県全体の卸・小売業の年間販売額に占める臼杵市の割合は昭和四十五年の二・八％から六十年の二・〇％へと三割近くも比重を低下させてい

る。これに対し、大分市では同期間に四三・七%から五五・九%へと大きく比重を高めていることが分かる。

また、商店の集中度を見ると、一店当たりの年間販売額は、昭和四十五年に千五百三十六万五千円であったものが、昭和六十年は七千八十六万と四・六倍増加しているが、県平均の七割近くにしか達していないことがわかる。このように、臼杵市の商業は伸び悩んでいることが伺える。

これに対して、商業振興策がさぐられているが、購買力の流出を防ぎ、商店街の共同化や、協業化・専門店化等の近代化を図り、魅力ある商店街づくりが急務であるといわれている。近年はアーケード設置や店舗の改装等の近代化も漸次進められ、中央通り商店街・辻周辺・臼杵駅前前の整備が進行している。

一方、消費者の安全・利便・快適性を基調とした、駐車場の整備、交通対策、臼杵の町の特性と歴史的背景を加味した個性ある環境づくりが望まれている。

注(1) 神戸信和・寺岡易司『臼杵地域の地質』(地質

調査所 昭和四十三年)

注(2) 『うすきの歴史的環境と町づくり』(日本ナシ

ョナルトラスト 昭和六十年)

注(3) (2)に同じ

注(4) 中野雅博「豊後水道西域における工業の立地と

その性格―佐伯・津久見・臼杵・佐賀関4地区

―」(『豊後水道域』大分大学教育学部 昭和

五十五年)。

注(5) (4)に同じ

注(6) (4)に同じ

(三) 臼杵の農業と臼杵湾の漁業以下次号へ)

表1 白杵市の製造業の業種別動向 (単位:人、百万円)

	昭和50年			昭和60年		
	事業所数	従業者数	出荷額	事業所数	従業者数	出荷額
食料品	69	1,261	24,126.7	39	712	11,283.7
飲料				7	607	48,111.3
繊維	1	×	×	1	×	×
衣服				2	×	×
木材	15	106	669.8	6	59	523.0
家具	11	78	362.5	6	53	387.7
パルプ・紙	3	15	20.5	1	×	×
出版・印刷	5	63	234.6	5	76	552.6
化学	1	×	×	1	×	×
プラスチック				1	×	×
窯業・土石	6	115	2,643.5	7	189	5,728.9
鉄鋼業	1	×	×			
非鉄金属	1	×	×	1	×	×
金属製品	10	138	838.8	7	110	1,141.7
一般機械	3	215	2,400.4	4	80	471.0
電気機器	2	×	×	2	×	×
輸送機器	18	1,499	18,066.7	21	995	37,261.1
その他の製品	3	8	9.8	1	×	×
合計	149	3,688	50,057.1	112	3,281	106,849.6

×:秘とく数 『大分の工業』による。

表2 白杵市の卸・小売業の動向 (単位:店、人、万円)

	昭和45年			昭和60年		
	大分県	大分市	白杵市	大分県	大分市	白杵市
商店数	20,375	3,579 (17.6)	721 (3.5)	23,188	5,990 (25.8)	699 (3.0)
従業者数	76,732	22,712 (29.6)	2,568 (3.3)	102,006	38,525 (37.8)	2,859 (2.8)
年間販売額	39,601,516	17,289,239 (43.7)	1,107,838 (2.8)	244,844,018	136,914,781 (55.9)	4,953,154 (2.0)
1店当り年間販売額	1,943.6	4,830.7 (248.5)	1,536.5 (79.1)	10,559.1	22,857.2 (216.5)	7,086.0 (67.1)

○「商業統計調査」県統計課による。
○()内の数字は大分県を100としたときの百分比

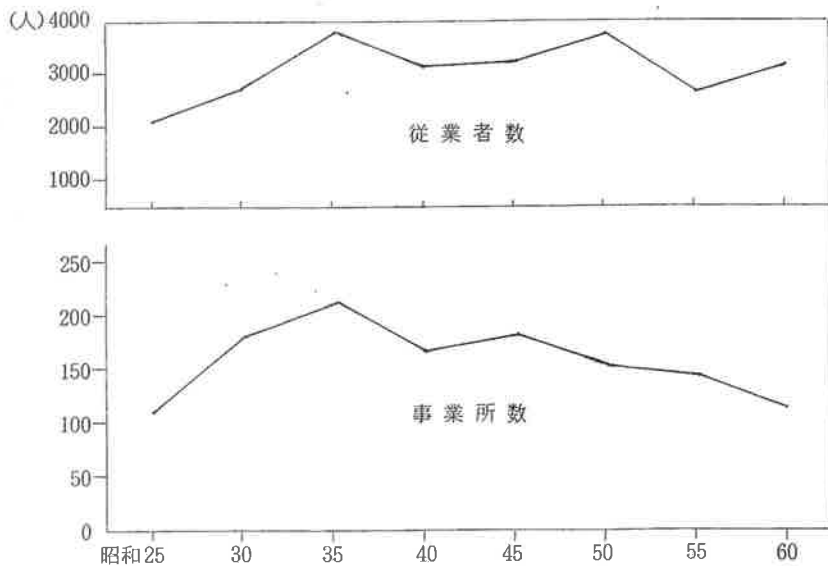


図3 白杵市の事業所・従業者数の推移
 (『大分の工業』・『白杵市統計書』により作成)

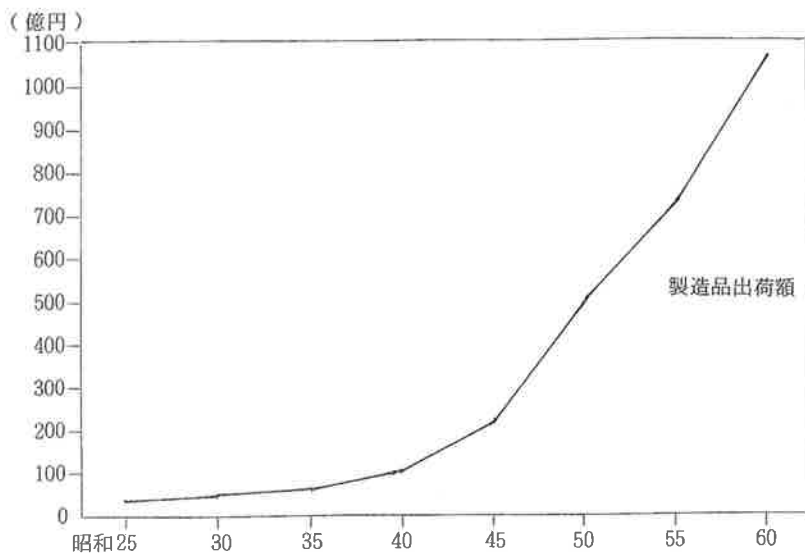


図4 白杵市の製造品出荷額の推移
 (『大分の工業』・『白杵市統計書』により作成)